

編集後記

『人間学研究』第二号の発行から二年の歳月を経て、ようやくここに『人間学研究』第三号をお届けする運びとなりました。内容は、公開講演会・公開シンポジウムより三編、共同研究に関する論文五本、そして共同研究の研究報告二つと盛りだくさんになっています。

周知の如く、日本の大学を巡る状況は一段と厳しく、本学もその例外ではありません。特にこの二年間は来年度の新学科（現代社会学科）設立に向けての準備や、両学科ともに新しいカリキュラムの整備などで、我々教員は研究活動に従来のような時間とエネルギーを割くことができない状況にありましたが、それでも両学科の先生方の研究に対する情熱によって共同研究は進められ、特に『京都論：その多文化的側面から』の共同研究班からは、その成果を『京都フィールドワークのススメ：あるく・みる・きく・よむ』（2003, 京都：昭和堂）として出版されましたし、またその他の共同研究班も出版に向けて着々と準備中であり、その研究の成果の出版が待たれます。

研究所から発信される研究成果の醍醐味の一つは、その学際性にあると思います。これは足し算ではなく掛け算の妙味と言えますが、本学は臨床心理学と文化人類学という、当時としては先駆的な学科を日本で初めて設置し、同じテーマを違った学問領域から独自の方法で考察することにより、単なる二つの異なった学問の足し算ではない、掛け算としてのユニークな研究成果を世に提示してきました。来年度からは新たに現代社会学科が人間学部に加わり、多くの新しい先生方をお迎えすることになりますが、これにより研究所の共同研究は新しい血を得て、二乗から三乗へとさらに飛躍し、一層学際的な研究成果を世に問うことができそうです。

大学の生命が研究と教育にあることは言うまでもありませんが、その教育のエネルギーの源は何と言っても研究です。教員が大学運営や教育に多大な時間とエネルギーとを犠牲にしなければならないとしたら、大学は活気を失い、決して教育も充実することはないでしょう。大学を活性化させるためにも研究所の果たす役割は重要であり、研究所での共同研究が大学にとって「元気の源」になるよう、尽力していきたいと思います。教職員の皆様の御支援・御協力を宜しくお願い申し上げます。

平岡 聡

編集委員

委員長：平岡 聡（人間学研究所副所長）

編集委員：日野舜也 杉本星子 鵜飼正樹

川畑直人 陸 君

編集事務：小橋川まさ美

京都文教大学人間学研究所紀要 第三号

2003年3月27日 印刷

2003年3月31日 発行

編集・発行 京都文教大学人間学研究所

〒611-0041 宇治市檜島町千足80

☎0774-23-3121

印刷 （株）栄文堂印刷所